

【小説部門・奨励賞】

大ちゃんの麦わらぼうし

私立筑紫女学園高等学校 第3学年 井上 明香里

五月の風が穏やかに吹く朝、村一面が見渡せるような小高い丘の上に座り朝日を見つめていた桐乃は、麦わら帽子が飛ばされてしまったことに気づいて、ふと我に返った。麦わら帽子は風に乗ってゆうゆうと西へ進んでいく。

「待って、私の麦わら帽子……」

あの麦わら帽子は、大ちゃんにもらった大切な帽子だった。大ちゃんは桐乃の幼馴染で、小さいときはよく桐乃の牧場で一緒に牛の乳しぼりをしたりした。そんな大ちゃんとも歳を重ねるにつれてだんだん疎遠になっていき、いつしか大ちゃんは桐乃のことを、「桐乃ちゃん」ではなく、「牧原さん」と呼ぶようになった。大ちゃんは今、都会で働く立派なサラリーマン。地元を離れることになった二年前の三月に桐乃の自宅兼牧場にやって来て、お世話になったお礼だと言ってあの麦わら帽子を置いていった。大ちゃんのことだから都会でもうまくやっていることだろう。桐乃は足を止めて空を飛ぶ麦わら帽子を眺めた。バックグラウンドの空は透き通るような青みを帯びていてとてもきれいだった。

「父さん、おばちゃんのお店で、新しい麦わら帽子買ってくる」

父さんは黙々と手を動かして、ただひたすら牛小屋の草かきをしていた。忙しいのか、反応はいつもほとんどない。父さんはとても仕事熱心な人だ。三百六十五日二十四時間、牛中心の生活を送っている。

おばちゃんのお店は桐乃の家から西の方角にまっすぐ進み、大きな橋を渡るとすぐに見えてくる。雨の日も、風の日も、雪の日も、どんな時でもお店の明かりが消えている日はない。

「おばちゃん、こんにちは」

店の扉を開くと、布やフェルトの優しい香りが桐乃の身体を包んだ。

「あら、桐ちゃん。いらっしやい」

おばちゃんはこの店の店主であり、大ちゃんの母親でもある。

「おばちゃん久しぶり。あの、麦わら帽子を一つください」

「麦わら帽子ね。桐ちゃんは特別に五〇〇円でいいわよ」

桐乃は優しいおばちゃんが昔から好きだった。その気持ちは今も、昔も、そしてこれから先もずっと変わらない。桐乃はお礼に、カバンの中に隠しておいた、手作りのスティック状のチーズケーキをおばちゃんにあげた。

「変な形だけど、自家製の牛乳使っているから絶対おいしいと思うの。よかったらおばち

ゃん食べて」

おやつ用に作ったチーズケーキの失敗作をカバンに入れやすいようにスティック状にして、帰り道にでも食べる予定だった。

「桐ちゃん、ありがとう。大樹にも食べさせてあげたいわぁ」

おばちゃんは子供のような笑顔を見せ、スティックチーズケーキを手で包んだ。喜んでくれたことが単純にうれしくて、カバンの中にあった残りのもう一本もプレゼントした。

帰り道は新しい麦わら帽子をかぶって帰った。来た時と同じ道を通っているはずなのに、帰り道のほうが距離が長く感じられて不思議な気分だった。「大樹にも食べさせてあげたいわぁ」というおばちゃんの言葉が頭の中で大きな渦を巻いてそして消えた。桐乃は腕時計の秒針と同じ速さで足を進めた。父さんと牛たちが待つ家に急いだ。

家に着くとテーブルの上にはシチューとパンが並べられていた。もうすぐ夏だということに、我が家はやっぱり少し変わっている。だけど、やっぱり、父さんの手作りシチューはいつ食べても美味しい。

「お前、大の店に行ってきたらしいな。さっき、大のお母さんから電話があって、桐乃にチーズケーキのお礼を伝えてくれって……」

父さんは桐乃がおばちゃんの店に行くと言ったことに気づいていない様子だった。

「チーズケーキがおいしかったって、電話越しに喜んでいたよ」

父さんは笑っていた。父さんの笑顔を見るのはいつぶりだろうか。昔はよく、父さんと母さんと笑顔で食卓を囲んだ。しかし、そんな幸せな日々はある日を境に、砂山が波にさらわれたように崩れていった。母さんは一人で自転車に乗って買い物に行った日に、交通事故に巻き込まれ帰らぬ人となってしまった。母さんの席が空いた日から、我が家の食卓から笑顔は消えた。

桐乃を見つめる写真の母さんはいつも笑っていた。久しぶりに家族三人で笑って食事をとれた気がして、桐乃は嬉しくなった。

七月になると、桐乃は積極的にキッチンに立つようになった。キッチンに立つ目的はただ一つ、あのチーズケーキを大ちゃんと一緒に食べるため。

「大が帰ってきているらしいぞ」

そう父さんが教えてくれたのは、母さんの日記を見つけた一週間後のことだった。

*

先日、掃除をするために久しぶりに母さんの部屋に入った。母さんは読書家だったため、部屋は本で埋め尽くされていた。

「そろそろこの本も処分しなくちゃなあ」

部屋の本たちは母さんがいなくなった後も仲良く肩を並べて、再び手に取られるのをお

となしく待ち続けていた。本棚には、本以外にも数冊のノートが並んでいる。桐乃は無意識に一冊の古いノートを手を取った。微かに埃の匂いがする。ゆっくりと、おそるおそるノートを開いてみると、黄ばんだ紙が再び呼吸を始めだした。紙の上には母さんの字がきれいに列をつくって並んでいる。そのノートは母さんが生きていた頃の日記だった。母さんの日記は毎日の些細な出来事や、子育てに関するおっちょこちょいなエピソードが記されていて面白かった。しかし、ページが半分に差し掛かったところで、めくっていた手が勝手に止まった。終わってしまうのが急に怖くなった。

「ここから先は父さんと読もう」

そう心に決めてノートを閉じようとしたそのとき、一枚の写真が床に落ちた。拾い上げた瞬間、ホッチキスの芯が刺さったみたいに胸がチクリと痛んだ。そこには、笑いながら何かを手握って食べている、幼い私と大ちゃんの姿が写っている。写真の裏には母さんのメモが残っていた。

「七月三十日。今日はチーズケーキを作った。でも、失敗。細長くなってしまった。だけど、桐乃とうちに遊びに来ていた大ちゃんはおいしそうに食べてくれた。うれしかった」

奇しくも、七月三十日は母さんの命日だった。

*

あの日は胸がいっぱいになって何も考えられなかったが、自分も母さんと同じ失敗をするなんてやっぱり親子だと思った。大ちゃんと食べた母のチーズケーキの味は記憶にないけれど、もう一度だけ、大ちゃんと一緒にチーズケーキを食べたいと思った。

キッチンに立つようになった日から数日が経った。どうせ作るなら、うちの牧場でとれる牛乳の味を生かしたチーズケーキを食べてもらいたい。そう桐乃は思った。特にクリームチーズは一から研究を重ねた。桐乃の家の牛からとれる牛乳は、スーパーで売っている他の牛乳に比べてあっさりしている。どうにかこの味をチーズケーキに生かしたかった。しかし、生クリームのもろやかさがどうしても勝ってしまう。クリームチーズは繊細だから部屋の湿度にもこだわった。自分の思い通りに作れず、何度も作り直した。しかし、そんなときには幼い大ちゃんの顔が浮かんだ。気づけば、大ちゃんに自分のチーズケーキを食べてもらおうこと桐乃の一つの夢になっていた。

八月に入るところには、トレーの上に四つのチーズケーキが仲の良い兄弟のように肩を並べていた。もちろんチーズケーキの形は細長いスティック状である。

「父さん、これ一つあげる」

牛小屋で草かきをしていた父さんは何も言わずに手を止めた。差し出されたチーズケーキを父さんはリレーのバトンのように受けとって、一口かじって微笑した。

「これ、おばちゃんと大ちゃんにもあげてくる」

父さんはうなずいて残りを一口でほおばった後、再び草かきを始めた。
早く行きなさい—そう言われた気がして、桐乃は走って家を飛び出した。

「おばちゃん、こんにちは」

息を切らした桐乃は、子供の時と同じように店の扉を思いきり開けた。無我夢中になって走った桐乃の足は悲鳴を上げている。ものすごい勢いで店に駆け込んだため、レジの前にいた店員らしき男の人も目を丸めて桐乃を見つめている。

「牧原さんだ！ どうしたの、大丈夫？」

そう言って優しく手を差し伸べてくれたのは、店員なんかではなく、大ちゃんだった。

「大ちゃん、大ちゃん、大ちゃんだ！」

大ちゃんを認識するのに一秒もいらなかった。うれしくて、ただうれしくて大粒の涙がどっと溢れた。

「そんなに息を切らして動物にでも襲われた？」

大ちゃんの笑顔は今も昔も変わっていない。

「そうじゃないの。今日はチーズケーキをおばちゃんと……、大ちゃんに渡しに来たの」

桐乃は訳も分からずチーズケーキが入ったタッパーを大ちゃんに差し出した。

心拍数が壊れかけのメトロノームのようにだんだん速くなる。

「これ、前におふくろが電話で絶賛していたあのチーズケーキだ！」

大ちゃんと桐乃の笑い声が数年ぶりに重なり合う。

「ちょうど今からお昼休みにしようと思っていたから、そこの公園で一緒に食べない？」

もちろん、桐乃の答えは決まっていた。

夏空の太陽は二人の再会を祝福するかのようには照りつけていた。何気ない人生にスポットライトが当たる日があっても、なかなか悪くはない。

「まぶしくない？」

「私は全然まぶしくないよ」

大ちゃんは目を細めて桐乃に聞いた。大ちゃんにもらった麦わら帽子じゃないことに気づかれないかと少しだけハラハラした。さすがに失くしたなんて、本人の前では言えない。

二人はスティック状のチーズケーキ片手に、ブランコに座った。

「なんかこのチーズケーキ、変わった形だな」

大ちゃんは珍しいものを見る目でチーズケーキをじっくり見つめていた。

「形は変だけど、味には自信あるから安心して。実は、うちの牛乳使っているんだよ」

得意げな顔をして、チーズケーキを頬張る大ちゃんにウィンクをした。

「うまい、なんか懐かしいな」

大ちゃんは多分、うちの牛乳の味を覚えてくれている。「懐かしい」なんて、桐乃にとって一番の誉め言葉だった。木々の葉っぱが拍手をするように音を立てる。母さんがもし生きていたら、またこの景色は違って見えたのだろうか。母さんのことを思い出すとなんだ

か泣けてきた。

「何で泣くの」

大ちゃんは笑った。木にとまっていた一匹の蝉も桐乃を慰めるかのように羽を震わせている。

「これ、覚えてる？」

母の日記に挿んであったあの写真を、ポケットからそっと取り出して大ちゃんに手渡した。

「俺たち、やっぱりかわいいな」

写真を手にした大ちゃんはそう言うと、写真を裏返して母が書いたメモ書きを目で追った。沈黙が続いた公園に蝉の音だけがうるさく響いている。

「あのさ、これを読んで俺思ったんだけど……、このチーズケーキ売って見たら？ これを食べたらみんなが笑顔になるし、おばさんもきっと天国で喜んでくれると思うんだよね」

大ちゃんは目を細めて遠くを見ながら言った。

「そうだね」

桐乃も大ちゃんと同じく遠くを見つめる。桐乃の髪が夏風に吹かれて大きく揺れた。

「じゃあ、このチーズケーキの名前は『麦わら棒』にしよう」

「え？」

大ちゃんはこのチーズケーキに『麦わら棒』と名付けた。スティック状だから「棒」、単純な発想は大ちゃんらしくて嫌いじゃない。

「なんで『麦わら』が付くの？」

桐乃は面白半分で尋ねてみた。

「それは……、あそこの木に麦わら帽子が引っかかっているのをたまたま見つけたからさ」

大ちゃんが指さす木から、見覚えのある麦わら帽子が夏風に吹かれて静かに落ちた。